

## 短期間で急性期病棟への入退院を繰り返した衝動性の高い患者の看護

—安定した状態で退院を迎えるまでの支援—

医療法人社団 五稜会病院  
鈴木大輔、鈴木美伸、吉野賀寿美、八木こずえ、中島公博



### 始めに

- ・当院の急性期病棟では広汎性発達障害が疑われる患者が増加している。また、怒りのコントロールが難しく、衝動的に暴力行為や怒声をあげる患者が増える傾向にある。
- ・本ケースも広汎性発達障害が疑われ、突然の激怒や混乱が生じ、不安定になることが特徴的で退院生活が長く続かず、急性期病棟での入退院を繰り返していた。

このケースの経過の特徴を振り返り、安定した状態で退院するまでに必要だった看護について考察発表したい

### ケース紹介

・A氏

(統合失調感情障害・広汎性発達障害疑い)

強迫症状や精神興奮状態により急性期(閉鎖)病棟への入退院を繰り返していた。

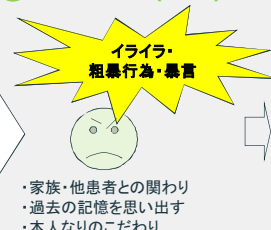
普段は穏やかに過ごされるが、突然易怒的になり興奮し衝動的に壁を蹴る、大声で怒鳴るといった行為がみられていた。

訴えの内容も他責、他罰的であり、混乱し妄想的なものに発展していた。また、薬剤に対しての自分なりのこだわりが強く薬物療法が困難な状況となっていた。

**今回の入院は、外来通院もままならず自宅で精神運動興奮状態となり、疎適性も不良で抑制を欠き自宅生活は困難な状態のため前回退院時から数週間で急性期病棟への再入院となった。**

### 介入の実際① —急性期(閉鎖)病棟でのケア—

<Nsの関わり>  
・支持的な関わり  
・言語化、感情コントロールの方法を練習  
・自身の衝動的な暴力行為に対して振り返り



<A氏の反応>  
・他罰、他責的な訴えは変わらず  
・Nsが関わると一旦は落ち着くようになる。  
・薬物療法に対しての偏ったこだわり

・家族・他患者との関わり  
・過去の記憶を思い出す  
・本人なりのこだわり

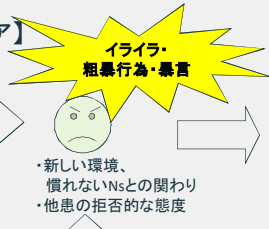
結果

- ・転棟: 粗暴行為や暴言の頻度が減少すると、短期間での再入院を避けるために開放病棟への転棟が検討された。
- ・CNSの介入: 転棟前から、困難ケース支援のため、病棟を超えて横断的活動をする専門看護師(以下CNS)が継続支援することとなる。

### 介入の実際② —開放病棟でのケア—

【開放病棟でのケア】

<Nsの関わり>  
・支持的、受容的な関わり  
・不調時、急性期病棟Nsの介入  
開放病棟での対応の困難から陰性感情も...



<A氏の反応>  
・他罰、他責的な訴えは変わらず  
・行動範囲の拡大  
・薬物療法への拒否

・新しい環境、慣れないNsとの関わり  
・他患者の拒否的な態度

CNSの直接介入(面談、ナラティブアプローチ)  
コンサルテーション(アセスメント支援・本人への対応を病棟スタッフへ)

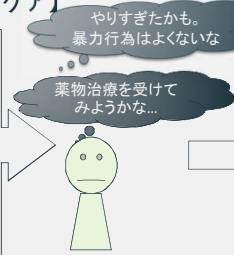
結果

看護師の関わりにより一時的に落ち着く状況ではあった。しかし、他患者からの否定的な態度や親とのやりとりから、徐々に看護師の関わりによる気持ちの変化も難しい状況となり、粗暴行為や興奮がエスカレートし急性期病棟に再び転棟となる。

### 介入の実際③—再び急性期(閉鎖)病棟でのケア—

【急性期病棟でのケア】

<Nsの関わり>  
・開放病棟での出来事を本人が経験している生活のしづらさとして共感する  
・生活のしやすさに焦点をあて今後どうしたいかを一緒に考える  
・薬物療法を受ける気持ちについて支持的に関わり、本人の思いを傾聴



<A氏の変化>  
・暴力行為に対して謝罪の感情を表出  
・薬物に対して柔軟な考えになり受け入れ  
・他罰、他責的な言動の消失

結果

- ・入院、開放病棟から再び急性期病棟への転棟での出来事を自分の事としてとらえる言動がみられる。
- ・興奮や混乱、粗暴行為がなくなり経過。家族の受け入れもよくなり退院となる。

## 考察

### 1. A氏に対して

＜これまでの入院＞  
突破的な衝動行為がある事から、開放病棟には行かず退院。  
生活経験は限定的で、怒りの原因は環境のせい、人のせいになっていた。  
⇒ケアの視点が問題点にのみ注目する事になっていた。



＜今回の入院＞  
開放病棟という退院後の生活に近い環境の中での失敗体験が、自分自身の問題に目を向ける契機となった。  
⇒生活と結びつけた振り返りが、本人自身の気づきや治療の動機となり、変化となった可能性がある。

### 2. 専門看護師の活動

CNSは、A氏が粗暴行為に至る経過や、対応による気持ちの変化を病棟スタッフと振り返り、共有した。当初、対応を苦慮していた開放病棟看護師に、時間の経過と共に前向きな変化が見られた。  
困難ケースにおいては、病棟を超えた横断的活動によって、集積したアセスメントや対応スキルを転棟先病棟のケアに活かし、看護チームのケア力の向上をもたらす機会となる。

## まとめ

- ・ネガティブな出来事であっても、本人の生活のしづらさとして受容的に一緒に振り返る事で、本人自身の気づきや治療の動機となり、変化となる(可能性がある)
- ・横断的支援ができる存在が、これまでのアセスメントや対応スキルを転棟病棟に引継ぎ、対応することで、看護チームのケア力の向上をもたらす機会となると思われる